

「模倣」における社会化と主体性に関する一考察

酒本絵梨子 (東京学芸大学連合大学院)

1. 問題の所在と目的

社会化とは、個人が当該集団の容認する社会的行動を習得することによって、集団への適応を学習する過程 (M.F.Nimkoff, 1964) や、社会の一メンバーになっていく全体的過程、つまり成員性の獲得 (M.Mead, 1928) などを指す。柴野によればこれらの社会化概念は①成員性の習得、②学習、③他者との相互作用を通してパーソナリティを社会体系に結び付ける過程、④社会体系の維持存続にかかわる機能的要因、の4点にまとめられると言われている。また、パーソナリティ形成という視点から見れば、社会化は成員性の獲得を重視するパーソナリティ形成過程の一側面であると言える (柴野, 1977)。

この社会化の学習の方法として模倣が挙げられる。幼児に見られる言語活動の習得や、基本的な生活習慣をはじめ、さまざまな身体技法が模倣によって獲得されている (伊野, 小林他, 2002)。

模倣は Murphy らによれば模倣のプロセスを分析するために暫定的な試案として、a)条件づけられた反応タイプの模倣、b)試行錯誤期に続く模倣、c)熟慮による模倣の3つのタイプに分類できる (Murphy&Murphy, 1931)。さらに内藤は、模倣内容についての意識や他人による評価への配慮の有無を決定因とし、社会行動としてこれらの Murphy らが分類した3つのタイプを a)－無意識的模倣、b)・c)－意識的模倣と区別し

ている (内藤, 2001)。

この模倣内容についての意識や他人による評価への配慮の無い無意識的模倣は、諸個人の内に定着している知覚・思考・実践行動を持続的に生み出す性向である「ハビトゥス」(Bourdieu, 1988)や「習慣」の学習として理解し得る。しかしながら、社会化がパーソナリティの形成の一側面であるとするならば、主体に意識されない「ハビトゥス」や「習慣」は柴野がまとめた社会化概念の③に当たる社会体系に結び付けるパーソナリティを形成しうるのだろうか。

そこで本研究は、身体的な無意識的模倣を対象とし、特に「引き込み」という現象を手掛かりに、無意識的模倣がパーソナリティ形成においてどのような意味を持っているのか検討を行う。

2. 無意識的な模倣と「引き込み」

無意識的な運動といえば、まず反射を挙げることができるが、本研究ではこのような生理学的、解剖学的な視点による検討ではなく、意識的・意志的なものに対して、抑制不可能性に関する視点からの検討であり、生理学的な反射を含まないことを、先に述べておく。

無意識的な運動の一つに「引き込み」がある。この現象は何らかの対象の動きに合わせて、本人の意思とは無関係に生じる身体反応のことである (貫, 1998)。この「引き込み」という用語は心理学者であるコンドンが、対話場面において、話し手の音声に反して自身の身体の微

細な動きが同期し、さらにその動きに聞き手の身体も同期していることを発見し、これを「引き込み」現象と名付けたことに由来する。渡辺はこのコンドンの対話における「引き込み」の中で、「領き」が了解の意味で交換されるものではなく、相手の言葉が終わらないうちから開始されていることを発見した（渡辺,1997）。また、舞踊を見る際の「引き込み」の有無を測定したのが、尼ヶ崎、貫らの研究である（尼ヶ崎,貫,譲原,1998）。この研究では、外部の時間パターンに同調するように身体内部の時間パターンを調節する作業が見られ、これを、「引き込み」に他ならないとしている。この舞踊を見る際の具体的な身体運動として、貫は音楽に合わせて体を揺らす、ロック会場でタテ乗りをしている聴衆や舞踊を見てリズムカルな動きにからだがつられることなどが挙げ、特に模倣的な運動に焦点を当てた例として、東映やくざ映画を見た後の観客が肩を怒らして映画館を出てくる場合や、ピナ（Pina Bausch,独のバレエダンサー1940-2009）の作品を見た観客が終演後、ダンザーの動きをまねる場合などを挙げている。これらの現象を受けて、尼ヶ崎は、「引き込み」とは相手の身体フレーズを読み取り、それに自分の身体フレーズを同調させているとし、主客が交替して信号を送り合うのではなく、発話主体である相手に一体化して同時に主体であろうとしていると解釈している。

タルドによれば模倣とは「一つの精神から他の精神への『イメージの転写』」として定義されている（Targe,1890）。このタルドの定義を用いれば、時間パターンや身体フレーズといった一つのイメージに同調するという「引き込み」は模倣であると言える。また、内藤の模倣

内容への意識や他人による評価への配慮という決定因を用いれば、「引き込み」は無意識のうちに行われる身体的同調であるから、無意識的模倣として分類することができるだろう。

この「引き込み」という概念から検討することによって、無意識的に相手に引き込まれ模倣することは、相手と一体化して、同時に主体であろうとする行為だと解釈できる。「主体-客体」という関係ではなく、自分と相手が主体であろうとしていると言えるだろう。

この自分と相手が主体であろうとするとはどのような意味を持っているのだろうか。清水はJ・Fフィヒテの身体論・承認に関する議論を基に、相手が自分と同様の身体を持っていると認識するなら、自分と同類のものであると理解し、この相互作用・相互承認によって「自己意識」「自覚」が生じていくと述べている（清水,1997）。清水の論からこの「引き込み」を検討してみると、発話主体である相手に一体化して同時の主体であろうとする、この行為はフィヒテのいう相手と自分が同様であると認識するという行為として解釈することができる。

3. まとめ

無意識的模倣には主体に意識されない「ハビトゥス」や「習慣」の獲得の他に、無意識的模倣である「引き込み」という現象から検討することで「自己認識」「自覚」というパーソナリティを形成する行為として解釈することができる。

主要参考文献

- ・ガブリエル・タルド、『模倣の法則』,河出書房新社,2007
- ・尼ヶ崎彬,『ダンス・クリティーク舞踊の現在/舞踊の身体』,勁草書房,2004
- ・貫成人「複雑系としての劇場」埼玉大学紀要 34(2),pp.1-15, 1998